

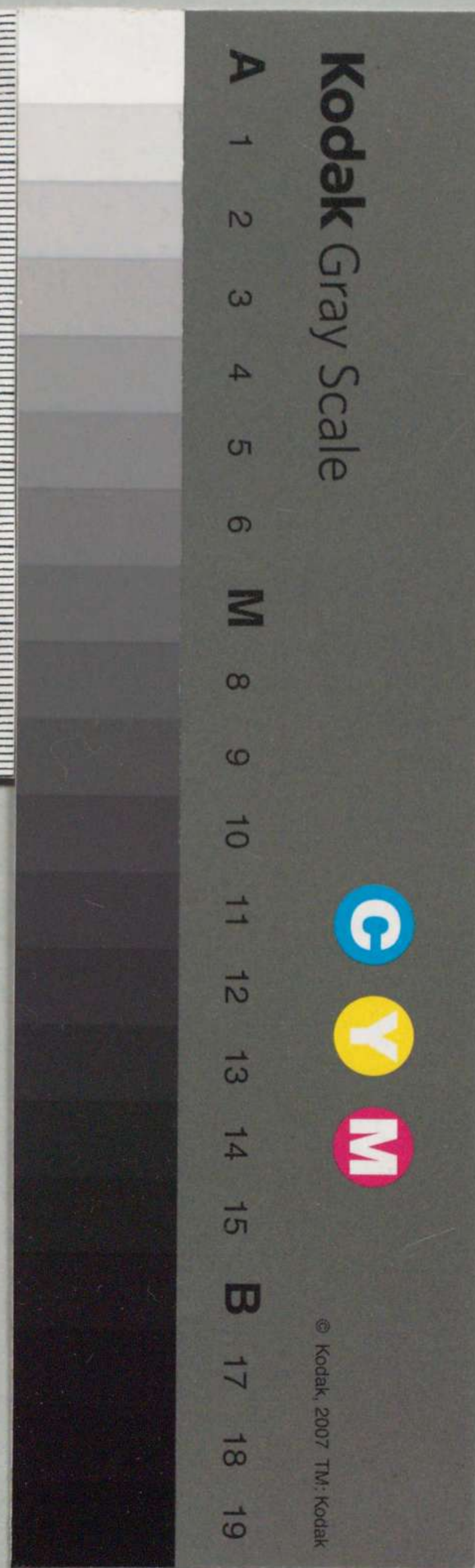
羣書類從

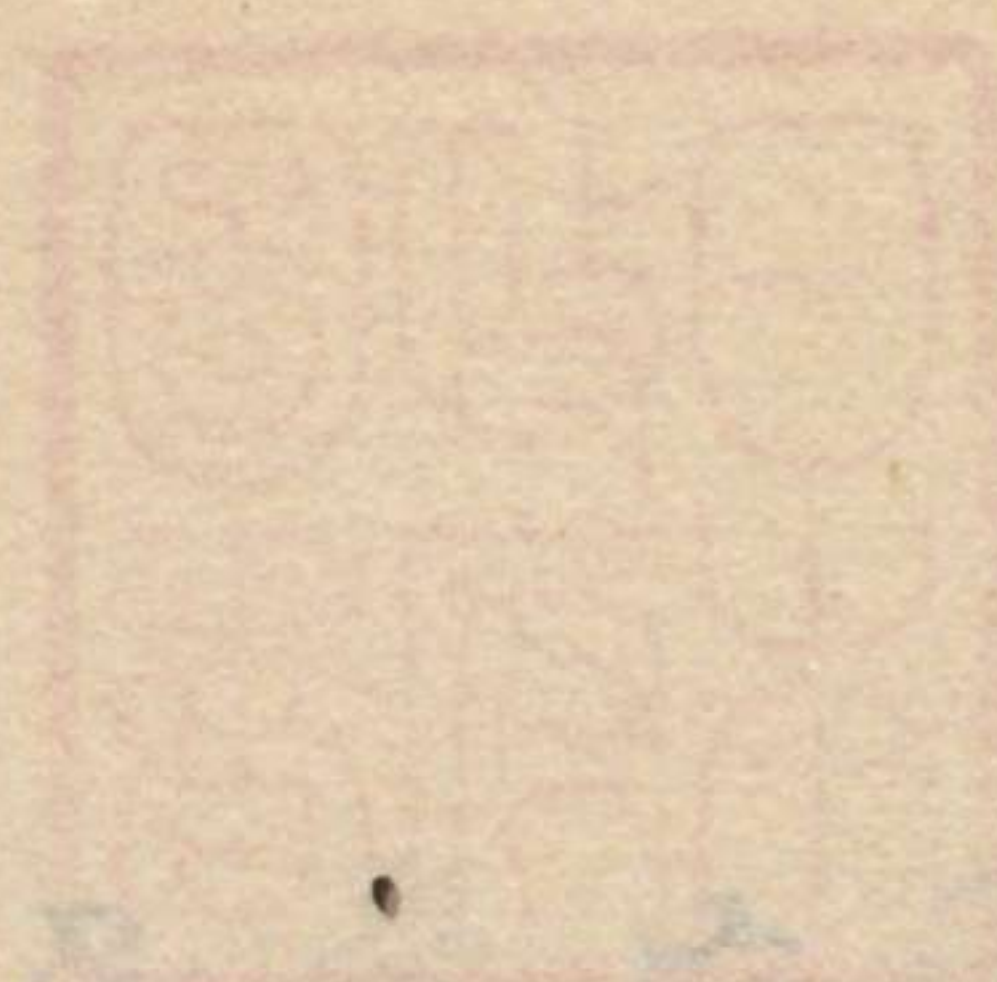
二百四十五

和書門			
九	五	九	五
二	〇	四	函
六	七	〇	冊

和書			
九	五	九	五
二	〇	四	函
六	七	〇	冊

内閣文庫			
番號	和	9595	
冊數	670	(312)	
函號	214	39	





東不吉類是也
 和歌部百卷
 六傳所理
 勅局六年
 山子
 時



羣書類從卷第百冊五

檢校保己一集

和歌部百家集十八

六條院理太史集題季々

兼曆二年殿上寄合

爲ぬさ記ふもろて山橋みづわのめりもるん

藤中將れ家の歌合

山さみ尾とにはげさくもあなをいふるやん

二佐れ川乃さし合の歌

時ゆけりつる山乃紅紫と成いふ吹は風さるん

遠岡郭よりふた

山をこれらふとふた郭外なる松といふは

郁芳門院根合并

ふたといふふたや我意に合はるるにのち

追叙松題

二葉なる松といふふたふたふたふたふたふた

毎朝修菊

菊の花はあつた月をいふ松のふたふた

多羽院花裁合と裁合と家保給ふ二首を新入

秋もあつたふたふたふたふたふたふた

秋風

秋風はあつたふたふたふたふたふたふた

秋風はあつたふたふたふたふたふたふた

秋風はあつたふたふたふたふたふたふた

秋風はあつたふたふたふたふたふたふた

秋風

秋風はあつたふたふたふたふたふたふた

秋風はあつたふたふたふたふたふたふた

秋風はあつたふたふたふたふたふたふた

秋風はあつたふたふたふたふたふたふた

東海に於て此の國はもとよりには遠く人のあつた
所なり

晴れ伏るもたまに風吹くはいさかたの春
 人く雨降るの野花と云歌とよ歌とよ
 雨降るはなみちやれあとうたあけあひまの村
 三條も内裏よりうけぬと始あ歌よふと
 一に花ははれ春成終といふ歌と

君代れ子とせのまに様も是やうなる人
かゝい傳はつれとこれく又かゝ傳はるを
ぬいゝいゝ原くくわけんれとこゝくいゝ

いふふうをちしひとせし
みとの女にうりて

何人にもうゝ心なれどかりけり
 ある六位の二方乃由許よりえ殿とて海に
 もろり奉法も成にせしめゆりし道さわり
 まろりさうとそと先路をさくこれ位
 らうさうとなるとて

重なることと此のまゝありぬみより此袖もあうん
 とさういふやうなこれ迄もさういふ
 ようなものにあらざるをたゞと此方にとれ袖をさねん

しあふぬとて里の疾も神よりしきまゝに流
田家秋真

風をながしけるは葉のたふさくは秋のあ

行路秋記

芳くぬきの萩原まきおの人の神句まで

二月廿六日松殿まき幸ありに又の日に

をきとてあふしきとあふしき

橋たにわさるは名はれはあまてしきまゝに

の条流るる落も入るるといふもは秋のあま

たまひしき

橋もてしきまゝにわさるは名はれはあまてしきまゝに

の条流るる落も入るるといふもは秋のあま

たまひしき

橋もてしきまゝにわさるは名はれはあまてしきまゝに

の条流るる落も入るるといふもは秋のあま

たまひしき

橋もてしきまゝにわさるは名はれはあまてしきまゝに

たまひしき

橋もてしきまゝにわさるは名はれはあまてしきまゝに

たまひしき

馬にひとあて

侯吉乃神之主

もろくにゆらとあまのうららに
あまのうららに

五十六

又これにふたつをいふをばうのうもき

[illegible]

あゝとて人々物にふりてかた

つめてゐる

とあるは、
此の如く、
乃て、
生に、
人、
公、
成

龍泉雪と云ふは

松子たれりき松のてく他を雪ふりつ

急

岩代の野中此書にありて意も年所を物とてある

奉此佈 女房北尾又右衛門守次郎

唐衣絶ときくは今そ法の如き入るも

返

今更に世に身を置く如く及そそみ耐を盡しむ

今春北山草堂有之

今更に其の意を以て之を記す

為月殿又此方に又正月十日行事ありて

そつうし

あゝ海はあゝと降るにけふもあゝと

頃ふくもあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

依月暮涼

あゝ海はあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

雨中不居

あゝ海はあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

遠村早苗

あゝ海はあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

逐日草滋

あゝ海はあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

明後夜満庭

あゝ海はあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

盧橋暮萱

あゝ海はあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

聞郭公志歸

あゝ海はあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

照射及曉

あゝ海はあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

幼急

我妻いもいさ山の妻なりや人へうけて来たり
遇ふを急

おいもいさ山の妻なりや人へうけて来たり
遇ふを急

大なりとて人へうけて来たりや人へうけて来たり

卯花處

川野をまじりて咲る卯花いさ山に咲る
逐夜侍部

さてもいさ山に咲る卯花いさ山に咲る
侍部

諸もにきい物部部なる人へうけて来たり

樹陰の宮

逢坂の関なりては山に咲る卯花いさ山に咲る

正月十日にわささささささささささささささ

又たわさささささささささささささささささ

三月に二月廿日わささささささささささささ

あさささささささささささささささささささ

さささささささささささささささささささ

ささささ

花みんとわささささささささささささささ

雪の中に泣きみまのれ梅花散りてまじりやあはれ
うめわらわの舟のまじりやうめははるかに
正月雪の散りて大納言のまじりやうめははるかに

返

頭戸のあて春の梢のまじりやうめははるかに
孫大納言のまじりやうめははるかに
うめははるかに

正月雪の散りて大納言のまじりやうめははるかに
うめははるかに

返

松のまじりやうめははるかに
うめははるかに

うめははるかに
うめははるかに

返

大納言

うめははるかに
うめははるかに

あつて一返り

はたしていふもあらうとてわづらひていふはなれど
うらやまに秋もいふもあらうとてわづらひ
もいふもあらうとてわづらひていふはなれど
いふもあらうとてわづらひていふはなれど

一宮紀伊君

うらやまをいふもあらうとてわづらひていふはなれど
返

いふもあらうとてわづらひていふはなれど
十一月廿日以後平賀流のあつていふはなれど

とていふて

いふもあらうとてわづらひていふはなれど

返

いふもあらうとてわづらひていふはなれど

いふもあらうとてわづらひていふはなれど

いふもあらうとてわづらひていふはなれど

いふもあらうとてわづらひていふはなれど

いふもあらうとてわづらひていふはなれど

松遊年友

いふもあらうとてわづらひていふはなれど

秋花催興

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

紅葉

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

意

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

返

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

いもに時をさあやうらんおあはれ秋のちりひ

万代松のまじりたる花のやふき花に似たり

院めく山家卯花類

通ひて紫のまじりたる花のやふき花に似たり

人共のゆゑにまじりたる花のやふき花に似たり

そなたに似たりまじりたる花のやふき花に似たり

返

今もまじりたる花のやふき花に似たり

暮山花葉

くらめたる花のやふき花に似たり

意

あつた花のやふき花に似たり

月照菊花

いづくも花のやふき花に似たり

花葉埋橋并意

小倉山花のやふき花に似たり

菊のやふき花に似たり

月

清き山花のやふき花に似たり

山家花

いづくも花のやふき花に似たり

中流とて初秋見む延齡寺

なほいふはるのえとて初秋見む延齡寺

は中流巨房のりしにゆきとて初秋見む

操乃ちあふりしとて初秋見む

名のそとにゆきとて初秋見む延齡寺

又曰返

春毎りきてみよ1毛し操もいふとて初秋見む

二月行田融院故花情人くよみ

うなぐあふとて初秋見む延齡寺

堀川院よりとて初秋見む延齡寺

なりと竹も改むとて

すなりと竹も改むとて初秋見む

潤二月よりとて初秋見む延齡寺

一そととて初秋見む延齡寺

二月よりとて初秋見む延齡寺

返

田敷とて初秋見む延齡寺

長治元年二月三日新事とて初秋見む

ふと池と花見

春よりとて初秋見む延齡寺

十月十日はあつて暮らうとすゝくまふ所
聞梨れりしりふなり氣成をこそて枝り
ゆひはさるゝ

二葉より秋味をさへらるゝ所いれはさるゝ
返

あられはしとれりふ事とれりあつてふ
旅人のされ秋味をさるゝとすゝくまふ
旅人またいひて旅人志れりれりさるゝとすゝくまふ

返

ふ事旅人ほとれりふ事とれりあつてふ

たにいれさるゝのりわけはなんたつとるゝ
ふ人くさるゝいゝゆかりし

楊花ふれふもいふえんけふ風をぬくふあつらん
東山観音寺とすゝくまふとあつてはる

ふ人くさるゝいゝゆかりし

あつてふ事とれりふ事とれりあつてふ
あつてふ事とれりふ事とれりあつてふ
あつてふ事とれりふ事とれりあつてふ

あつてふ事とれりふ事とれりあつてふ

返

藤のむらうか物をふらん秘くまゝあまみえん
前主上頭後頼朝臣のやふれ花見小人くそと
ひくみふりくそとあて

春風又雨。月夜。樓上。人。且。吟。歌。也。

君の身は花の下とみ物を風なすともさへは
人くはまてくうりて恋奇みしよ

あつた山をなつたのもええと記述する外
後忠孝相家として急務十首をなつたに占る

無くて此の如くせしむるべしと云ふ

とてはまゝの

玉律鳴蟄
人海
三
今
世
今
事
故
陳
之
今

ちくもの虫

う、續く、六段、此段、神、い、と、引、お、縄、の、終、一、我、之、

物なき内と外と

下なる片姉と名あるいすうらもさけまん妹

いのちをいぬ

とくふにけりと神やけん祇深きなる人なり

決いゝ乃急

心をいふも君にうけぬた重なりをうて糸はつらふ

あふきと何れつそそくさひねり月かぬとて
そそくさひねりのさ

いづれもふりかへて夜に寂しき袖にぬえし花

雲々れあわーかゝきりふれうと物うんち師
加いせれやうと鳥

いふ針みとの使ひとひきあつておれいさめとさつと
 能く七条亭人へ櫛歌十首よみしなり

今もわさきよりいんさうをも贈れまゝにくだらん
たうとをねてやういふ様も春くともあらじのこころ
機織ぬる時とぞ一葉のもののやあそびれどくちを
はらへむ白にぬきはなれどもみづかきと風光つすき
白きとふゆかさうけりかれこすむやこのこそあらん
夜えらゝ雨の山はうす様でうきとてみることもあら
月れをひかりてをえ梅も山中風の音もいふ人
花のしら流れる山のこころむ面影もせうも人も
雪の花もさうさう山里ハ音もさうぬきとやういふ
よ月れもみづかきとや山橋清き花は花はうすらん

於人并河原紫花より并志

小倉山よりわりの吹くはとるもの滝を紅葉より
春いよとゆきとれきとるきと神よりとる妹に
雲居寺上人西後物故長く花海可相之和并
乃中いより

春風の如きよりとるきと花のよとものななり

春情在死願

様も自いよとる何よりとるきとる半のう候より

桂山よりとるきとる山郭より并志

夕陽日入佐の山よりとるきとるきとるきとるきとる

はしよりとるきとるきとるきとるきとるきとるきとる

水色より並題

見渡河よりとるきとるきとるきとるきとるきとる

月夜於東之東夜月并志人志

明るよりとるきとるきとるきとるきとるきとるきとる
これよりとるきとるきとるきとるきとるきとるきとる

長實物より八条亭瑞路落葉并志

家にいよとるきとるきとるきとるきとるきとるきとる
とるきとるきとるきとるきとるきとるきとるきとる

月亭より并志

雪隠地比東のる根もまへにふもみそを案にふり
いふとん野にふりた若草もふもみそにふりて

曉尋花

春と大ていふにふりてはあふれはふりてふりて

同日晚京急

付しふふふふふふふふふふふふふふふふふ

永久四年四月四日ふふふふふふふふふふふ

卯花

卯花に咲きふりてやふふふふふふふふふふ

郭々

深山よりふりてふりてふりてふりてふりてふりて

葛蒲

ふりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

子荷

子荷よりふりてふりてふりてふりてふりてふりて

急

急ふりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

急ふりてふりて

面頰紅
握河疏初度

春

立春

うらなひをまふふ所は忠國の味もや絶えん

子月

君代と子母の事とふ、お世の例なりんうそ

新

足腰をい春に
なまじりて
あかき
しひ
梅井乃里

管

當れなりふれきくやまのつる吉備の穴を成るん

小
榮

今春も子孫を地流へ

疎靈

山里の白雲、草の青、水の色、月

梅花

梅を以てて春風をたふす神と号するなり

衍

位保山王柳系成波けてん秋まに風を嬌さるる

藏

葉の蒼々として春にふりて
 乃のうきとて

楊

楊花白くは花を物とす風はるるのうへに

玉面

象より月面ありと花はなほはるる

春駒

さうたう人さうじふ野よりゆる駒あき

帰馬

今のはるは花あはれは花はみさう

奥子鳥

小東中にみさう花はみさう今

苗代

小山田種南とさうの北は海はつ

葉葉

雛子鳴山田の北はみさう

杜若

東海はるる花はつ春はみさう

藤

後にはみさう花はつ春はみさう

歎

山吹を花はみさう花はつ春はみさう

三月令

花のあまはなきとせしむるにふれしうきまはな
夏

更衣

いほしきふらふ川が衣ひをぬきとふらふ
郊花

いほしきふらふ川が衣ひをぬきとふらふ
夢

いほしきふらふ川が衣ひをぬきとふらふ
郭公

いほしきふらふ川が衣ひをぬきとふらふ

葛蒲

いほしきふらふ川が衣ひをぬきとふらふ

いほしきふらふ川が衣ひをぬきとふらふ
早苗

照射

いほしきふらふ川が衣ひをぬきとふらふ

五月令

いほしきふらふ川が衣ひをぬきとふらふ
庭橋

昔者乃花柳や匂ふらん山は〜きんさう〜なく

大平にあらひまゐる舞大〜みゆらひ〜〜雲は

け〜も子まい〜と〜い〜わ〜と〜た〜の〜す〜い〜ら〜

水室 け〜と〜と〜つ〜と〜な〜じ〜運葉を〜枝〜枝〜の〜葉〜り〜

夢は日も涼〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜

し〜す〜た〜の〜風〜も〜す〜す〜す〜て〜勝〜乃〜清〜み〜涼〜り〜わ〜あ〜と

荒和坂

水月れ川〜の〜柳〜ら〜る〜ひ〜さ〜ま〜じ〜の〜後〜あ〜今〜を〜た〜

秋

立将

お〜こ〜秋〜秋〜も〜風〜の〜涼〜〜い〜は〜い〜つ〜秋〜な〜や〜あ〜ん

ひ〜こ〜早〜れ〜ゆ〜も〜た〜後〜も〜る〜天〜川〜思〜ふ〜次〜渡〜り〜ま〜れ〜ん〜と

そ〜れ〜も〜こ〜〜い〜し〜席〜を〜う〜〜う〜き〜あ〜も〜ら〜〜と〜も〜う〜と〜

女帝花

秋雲にふれり小蛇れ女帝も我なりと人自へ思ふ

薄

風ぬきばも野れ落りてく露らとく小蛇とて

荇萱

鶉かくつくと小蛇のりやうなひたる秋の夕暮

桑

妹れ地へ音と人自らゆらとゆきとくみぬ人なり

萩

山里にしかけ小蛇風とくおとく人自もそやん

雁

古里はるる唐やあじと人自とくはい月とあけり

藤

秋葉をけけ山とく小蛇とてはまといふとく小蛇のり

露

月とく人自とく小蛇生にいとく人自れあけ

亭

白波れあけりてみとく人自とく小蛇とて

槿

浦の海に浪やれと人自とく小蛇とて

約追

門庭をさぐれば道々曉く庭のあけを月影の
月

山端より月影を照る我々なまそと

接衣

衣のけしきもさうさう入る公のなまそと

虫

夕去らばしら秘地は我々のいとおなまそと

菊

さすくさ菊の葉にまあるいひつるなまそと

紅葉

浅いぬはれ葉のさうなまそと

九月魚

紅葉のしらけはけしきもさうなまそと

冬

初冬

雪のさうなまそと

付面

天はくす雨の袖のさうなまそと

霜

さびるまゝいそがれ衆人のやく衆あつたのいふ

人自よりあれたる我他はなにけむとやみん

雲

白く残る坂山と越えぬ小葉の葉に雪ゆりしき衆

寒き

衆よりいふはゆりしき衆てきれとあてきり

千鳥

ふたれよりあてきりしき衆てきれとあてきり

氷

浪のくさくさいなぐたふいとあてきりしき衆てきれとあてきり

水

浪のくさくさいなぐたふいとあてきりしき衆てきれとあてきり

網代

浪のくさくさいなぐたふいとあてきりしき衆てきれとあてきり

井

浪のくさくさいなぐたふいとあてきりしき衆てきれとあてきり

鷹

浪のくさくさいなぐたふいとあてきりしき衆てきれとあてきり

炭

炭竈のいゝもふゝいゝあふあふたゝ人如く小蛇を人

埋火

山里のいゝあふあふ人如く蛇を人如く

除夜

門堂のいゝあふあふのいゝあふあふのいゝあふあふ

急

初急

おひあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

不被知人急

我立ふゝいゝあふあふあふあふあふあふあふあふ

不遇急

我立ふゝ師れ山のあふあふあふあふあふあふあふ

初逢急

揚るゝゝみてれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後朝急

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

遇不逢急

神をさひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

縁急

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

思

何人を見むひらふらふはげふもるがふを

片と

おどきれおひてとてあふ浦たののほれふらふ

恨

思ひふらふもふらふみとれふらふらふ

雑

曉

山里は風のふらふらふはげふらふらふ

去

ふらふらふらふらふらふらふらふらふ

竹

ふらふらふらふらふらふらふらふらふ

葛

ふらふらふらふらふらふらふらふらふ

鶴

ふらふらふらふらふらふらふらふらふ

山

ふらふらふらふらふらふらふらふらふ

河

舟よりくき渡りて地さう河の海よりなることいふに
野

将らう此草のぬきまに都の人た社と云ふ所を
岸

いもかりくもれうふひきうんをみの実城より載るに
橋

東路れきの舟宿杉ぬきうもくさうかきさうさうわ
海路

杉を舟さうに波のぬきも藤戸ぬきうて浦はる
旅

あみさう人れきうこれぬぬわ紋衣も此旅のぬき
別

唐衣袖れぬきうさうきうきうきうきうきうきう
山家

欄れきうわし舟乗れぬきう入のぬきう海をさう
田家

小山田の欄れきうあきまほらに人ぬきうきうきう
懷舊

未乃きぬきうきうきうきうきうきうきうきう
号

うへ後れまわらわあふり 黄ひくとゆきみきや
無常

朝日あふるわちり命をたふし かりふ人ぞくくれ来
述懐

ふとわこい台身ハ我の白きかりられ雪あゆりはるれ
従

馬ふゆくのふぬとふて 徳成をりう方試てよ
人々歌を并船中急とふきみくに

衣帯はねりふ人山原の花のやりをく人もふいなる
流るるあひつに せとて 勢の方をたふたふ

都岡郭と并急

時をふとふてふとふきくたてふ急いふくつりふ

妹う我をゆらん出くみふ急いふははてななる姿は

新中將渡中院初統和歌鶴安進来

じまてわたりふあききふなるはふふふふふふふふふ

新中將家相安合歌

五月周幅初れふの河をてふいふやうふふふふふふ

五月雨

五月雨ふ浅きふの河は花ふとふこれふふふふふふ

悪

思ふれふもさへもたへてふれうらふ
あつとみえ大やまのうらふつとみえ
あまのうらふ玉章とひらけうらふつとみえ
袂のさへうらふつとみえうらふつとみえ
とらふとみえとみえとみえとみえ

水風曉来

夕陽夜じふあもなまきとみえ
庭樹嫩日并意

みれ月れうらふとみえ我家の櫓のくせうらふ

箱根なるみれとみえとみえとみえ
とみえとみえとみえとみえとみえ

夏衣裾地のきとみえとみえとみえ
とみえとみえとみえとみえとみえ

ぬくみれとみえとみえとみえとみえ
とみえとみえとみえとみえとみえ

はとみえとみえとみえとみえとみえ
とみえとみえとみえとみえとみえ

はとみえとみえとみえとみえとみえ
とみえとみえとみえとみえとみえ

天川の海よりいづれもさる人沙汰うらも秋の
月を秋友

きよみ入山れの如くもてふとわらふ秋の月
九月十三日詠月歌并恋各一首

秋の今もむいりいさぬるりはらとあふ秋の月
寄来恋

いよとん我妻あまむらともふふはをれあふ秋の月
月照旅宿并恋

いづれあふさるぬ月と旅たに旅のいほりふふあふ秋
の月

旅宿吉社

そのみのかきしきり住まれきふふ秋の月とあふ

秋菊園秋歌并恋

きよみあふさるぬ月と旅たに旅のいほりふふあふ秋
の月

十二月廿日詠月歌并恋各一首

いよとん我妻あまむらともふふはをれあふ秋の月
月照旅宿并恋

いづれあふさるぬ月と旅たに旅のいほりふふあふ秋
の月

きよみあふさるぬ月と旅たに旅のいほりふふあふ秋
の月

後秋れきみり

我の雪をぬきまがへしとてふもわが心なけ

人いふゆゑをわが心なれとてふもわが心なけ

山寒花連并急

吉野山まはるなわが心なれとてふもわが心なけ
あすはしうきてはたけの心なれとてふもわが心なけ
お梅の心なれとてふもわが心なけ

様もまはるなわが心なれとてふもわが心なけ

お梅の心なれとてふもわが心なけ

月山庄にて死す意へ

来り下りて死す意へ

お梅の心なれとてふもわが心なけ

お梅の心なれとてふもわが心なけ

お梅の心なれとてふもわが心なけ

人く歎き花梅并急

お梅の心なれとてふもわが心なけ

お梅の心なれとてふもわが心なけ

平等院僧正講経願人へ

お梅の心なれとてふもわが心なけ

雨 郭公并志

み月あふよりけしの郭公志の女姫きて小春のよ
閑さうらにさうと柳のまゝにけしとあはれ我も人ぬ

詠 盧楊薰風和弄

夕月夜も備より風をな神女となりけるれ
たれりてこの意

此より後とるぬもり今も侍といふ一年も一

結句 郭公并志

友なうらきう一目らと杜鵑のうらまはに今も鳴る
うらまはにけしとあはれ我も人ぬ

草花 吉秋頭院人

落葉秋のほろやけよりけしとあはれ我も人ぬ

曉 知早涼并志

曉風やけのまらけとあはれ我も人ぬ
意よりて春のへたるま女姫もくやうくも結句あは

月不撰處并 賢今和志

月不撰處もけしとあはれ我も人ぬ
いれなきうらまはにけしとあはれ我も人ぬ
さこれりのみ後朝のまにけしとあはれ我も人ぬ
うらまはにけしとあはれ我も人ぬ

三枝わたり人あふれ
 まんじをのつゝ衣といやや
 さうせはつとんとあふれ
 むまにいつたむね
 おもひごとく蹴るふし
 やういふふれいふふれ
 とほろりてかたん

洗ひのさし水とくをせり
 ぬれ中りぬいしあぬはよりてすかち
 ふもやゆき神無月つづきのいさん

[illegible]

君より花摘紙に切るそ山郭より一丁とたなく
返

今もわも花摘とたおくらん山子祝

ふゆふとふゆふ

和歌二百四十九首

其中人形二十一首初五通
二百五十一

治承四年九月廿八日書写早

建長五年正月より藤三位重安校合

文明二年正月於秩父墨土陣下書写之仍

校合早

右頭季卿集以百花菴宗古本校合畢

左京太政官輔卿集

鳥羽 永久四年四月四日鳥羽殿哥合卯花

朝日山ゆりてふ里の卯花紙さる布と鳥のふ

郭云

おほのふゆふふふふふふふふふふふふふふ

葛蒲

郭代とゆふふふふふふふふふふふふふふふ

早苗

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

魚